

---

# 白き翼

宿野部 湊闇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白き翼

### 【Nコード】

N0516E

### 【作者名】

宿野部 漆闇

### 【あらすじ】

コーネリアンを舞台に突如出現したカオスと呼ばれる怪物に村が襲われ生き残った2人の少年と少女の物語

## プログラム

ここは、惑星コーネリアン。魔法と蒸気科学と呼ばれる技術（地球では産業革命と同じくらいの技術）があった。蒸気科学が発展に従って人々を苦しめる存在が現れ始めた。

その存在はどこからともなく現れ、人間の生气吸い取っていく。悪魔な様な生物だった。

その生物の名を総称してカオスと呼ばれていた。

カオスを倒すすべはないと思われたとき、ある噂が流れた

・・・1人の少年と1人の少女が20体のカオスを3分足らずで倒したらしい・・・

この話は噂が流れる数週間前から始まる

## 一羽目 始まり

皇国シユワルツ・ハインスより北に十日ほど行った、標高9873mの世界最高峰の精霊山ガーナ霊山の山頂にひっそりとたたずむ村があった。コウリア村というその村には10数人の老人たちと2人の子供が住んでいた。

その村のはずれにある屋敷のような大きい山小屋に一人の少女がやってきて、ドアをノックした。

「はいはい、どなたかな。」

大柄な初老の男性が家の中から現れた。

「こんにちわ。おじ様。」少女はお辞儀をした

「ウエンはいる？」

「ウエン？そういえば朝食も早々に出掛けて行ったが、まだ戻っていないな。ウエンが帰ってくるまで中に入って待ってるかな？」

老人は、笑みを浮かべた。

「ええ、そうしてもらうわ。」

初老の男性は少女を中にいれた。

家の中は、右側は暖炉があり、左側にいくつかの部屋に別れていた。でも、どの部屋にも扉がなかった。

少女は暖炉の前にあるひじ掛け椅子に座った。

「もうすぐ戻ると思うのじゃが。」

その時、行きよいよくドアを開け少年が入ってきた。

「インディ・ウエンディア、只今参上」

二人はため息をつき初老の男性はキッチンに向かい、少女は額に手をあてさらに深いため息をついた。

「あ、イリア居んだ。どうしたの？」

ウエンディアはあっけらかんとした感じで言った。それを見た少女<sup>イリア</sup>はウエンディアの態度に腹を立て怒った口調で、

「ウエン、あんたまた狩りに行っていたでしょ!!」

ウエンの胸を人差し指で突き、ずいずいと押した。そしてウエンは指で押されながらなんとか耐えていた。

「痛いよ、ルナ。何もそんなに怒らなくても。」

ドアによりかかったウエンは、しょんぼりしてウルウルした目でイリアを見つめた。

「あっ!! ごめん。言い過ぎた」

イリアはそんな彼をみてやりすぎてしまったと思った。

「なーんてね。そんなことで俺がイリア、また引っ掛かった。そんなことで俺は泣かないよーだ。」

ウエンはいたずらな笑みを受けべ、走って一番奥の部屋に入ってしまった。

「もう、ウエン今度という今度は許さないから。」

イリアはウエンの後に続きながら部屋に入った。

初老の男性は2人の姿を心配そうに見つめた。

「ウエン、村の外に出るのは危険なのよ。わかってる?」

イリアはウエンに対して説教じみた話をしていた、ウエン自身は聞く耳を持っていなかった。

ウエンはイリアの説教を耳にたこができるほど聞かされていたし実際に外はカオスとかいう得体のしれない怪物もいるのも知っている。だけど、この村には面白いことなんてないし食料も山のとっぺんだからほとんど何もない、一初老の男性（お父さん）もだいたい年がいきすぎてから無理もできないから少なからず体に影響を与えないようにしたいのが本音だった。

「ウエン、聞いているの?」イリアはウエンの顔を覗き込んだ。

「ウワァ」

気の抜けた声もれウエンは顔を赤くなってしまった。イリアはク

スツと笑い説教をするのを一時中断して、イリアがウエンに説教をしている間にもつてきた、ココアを少し飲んだ。

「所で、なにが狩れるの？」

「え！？ イリア気になるの？」

ウエンは少し驚いた。

女の子が、いや、イリアならありえないか、でも何で行きなり？

「何で行きなりそんな事気にするの？」

「いやあのーいつも手ぶらだから・・・」

何でそんな事聞くのか自分でもわからなかった。

「山狐イノシシ（サンコ）と一猪だよ。」

「え？」

「俺が狩る動物。」

ウエンは少し恥ずかしそうな顔をしてココアを一気に飲み干した。

日が傾き始めた頃、ドアをノックし老人が入ってきた。

「ウエン。少し出てくるからな。」

「どこ行くのさ、父さん。」

「いやな、今から緊急の集会があるんだ。まあ2、3時間で戻るからな。イリア。」

初老の男性はそう言いながら、新しいココアを置いて、空になったこつぷを二つ持って、

「村全員の出席だから、もう少しここにいてくれないか？」

「ええ、いいですけど。」

イリアは胸がざわめき寒気が襲って来た。

「そうか、ありがとう。」

そういつて老人は部屋を出てやがて家のドアが閉まる音が聞こえた。

「緊急つて、何かあったのかな？」

ウエンはさっきイリアの説教を思い出した。

「まさかね。」

ウェンはそのことを心の奥に閉まった。

.

## 一羽目 始まり（後書き）

登場人物 1

N A M E : ウェンディア・ルースベルト

A G E : 16

M a i n e   w e a p o n : 刀

S u b   w e a p o n : 短刀

紹介

白き翼の主人公。山奥にある村に住む少年  
スカイブルーの目に黒の髪でやや子供じみた性格をしている。その  
ためイリアによく説教される事もしばしば。  
村の襲撃によりある力が目覚め、旅をすることになる。



## 二羽目 襲撃そして力

ウエンの父親は村の中央にある高床式の小屋に入って行った。中に入ると薄暗く四隅と中央に口ウソクが灯っていた。

中央の口ウソクを囲う形で、老人たちは既に輪になって話し合っていた。

「おお、来たか。待ちわびたぞ。ケビン」

小屋の奥にいる、最も老けている口髭を生やした老人がにこやかに言った。

「遅くなつてすいません。長老。」

ケビンはそう言いながら長老と向かう形で、輪の中に入った。

「ちょうど、ウエンディア君とイリア君のことを話していたところじゃ。」

長老はゆっくりと話し始めた。

「2人ともすでに成人となっています。本当のことを話してもよろしいかと。」

村の中でいちばん若い（二人を除いて）初老の男がずっと前に出た。

「いやまだだ。まだその時ではない」

ケビンは冷静に言った。

「その時とはいつですか？」

ケビンは応えなかった。否、応えられなかった。それは、彼等が

此処に来たのとはほぼ同時期に力オスが発生し始めた。

「彼等はあまりに幸せ過ぎる。」

「でわ、厳しくしろと？」

「違う！！ 私は彼等には強くなつてほしいのだ。」

思わず立ち上がって、叫んでしまった。長老はケビンと初老の男性をなだめた。

言い争いは延々と続きかれこれ三十分以上はたとうとした時、不

意に長老が、

「最近この近辺でカオスが目撃された。」

カオスという言葉が出た時、全員の血の気が引いた。

「この近辺で、ですか？」

ケビンは恐る恐る聞いた。

「うむ、先日ウェンとイリアの様子を見に、皇国からの使者が来ての、いつも数人は来るはずなのじゃが、その日は1人だけじゃったから、ワシは『今日は一人かの』と聞いたら、使者の顔から血の気が引いて『あと、2人来るはずでしたが、カオスにやられてしまいました。』と言ってな、詳しく聞くとここから一時間ほど下った森で殺られてしまったそうだ。」

長老はゆっくりと話した。その場にいた全員が凍り付き、沈黙してしまった。

「やはり、あの2人しか対抗手段がないとは、人間とは弱い生き物だな。」

沈黙を破ったのはケビンだった。

その時、村の守衛が息を切らしながら中に入ってきた。

「か、かか、かかかか、か、カオスが現れました。」

「ウェン達が危ない。」

誰かが言って、その場にいた人たちは行きよいよく立ち上がり、2人のもとに急いだ。

しかし、ケビンの家に向かう途中、すでに集会場にいた半数以上はカオスにより死んでしまった。

ケビン（ウェン）の家

ケビンは家に着き2人がいる部屋に向かった。

「ウェン、イリア無事か？」

ケビンは行きよいよくドアを開け、繰り返し叫びながらウェンは

というよりも破壊した。

「無事って何のことさ？」

ウェンとイリアは同時に答えた。

「話は避難所で話す。はやく来い。」

ケ빈は家を外に出たが既にカオスは家のまわりを何重にも囲んでいた。

「くっ、しまった。」

ケ빈は苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

ウェンとイリアは話を聞いていたカオスを目の当たりにして驚愕した。ウェンとイリアが聞いた話より今いるカオスがおぞましく見えた。紫や黒のまだら模様をした人型や動物型などがざっと20以上はいた。

じりじりとカオスたちは3人との距離の円を縮めケ빈はそばにあったライフルを構え人型のカオスめがけて撃った。

<バン バン バン バン>

ライフル弾は見事にすべて当たり風穴を開けたが、すぐに修復し人型のカオスの腕がケ빈達めがけて伸びた。

ケ빈はウェンとイリアを脇に抱え飛び退いた。

カオスの腕がドアに当たるとたちまちに腐りボロボロになって、

ケ빈はウェンとイリアを下ろし、

「お前たちは逃げる！！そして、皇国の皇王様に会え！！」

と言って手紙をウェンに渡した。しかし、その後ろに狼型オオカミのカオスがいることが後ろから近づいていることに気付かなかった。

「危ない！！」

イリアが叫び、ケ빈が振り向くと同時に狼型のカオスはケ빈の首めがけて襲いかかった。

「ウワァ」

ケ빈が叫び、倒れ、

「二、二ゲ、ろ」

血の気が引き、肉はただれ、歯は剥き出しになり、目は陥没し、皮

が溶けやがて血のついた骨がむき出しになった。

ケビンを食らった獣型のカオスは分離し2体になりそして、ゆつくりとウエンとイリアに近づきだした。しかし、恐怖とケビンの死でその場を動けなくしていた。

2体の獣型のカオスがウエンとイリアに飛びかかろうとした時、ウエンとイリアは目をつぶった。

「キャーーーーー！！！」

「うわーーーーー！！！」

しかし、いくら待ってもカオスがウエンに飛びかかってこなかった。

「へ？」

ウエンは目を開けた。そこは白く何も無い空間のそらにいた。

ウエンはイリアの所へ駆け込み、抱きかかえた。

「イリア？イリア？」

ウエンはイリアを揺すりながら繰り返し呼び掛けた。イリアはゆつくりと目を開けて、

「ん、ウーん」

「イリア、大丈夫？」

「うん何とか。・・・ここどこだろう？ それにカオスやおじ様は？」

イリアは起き上がり、あたりを見回した。

「わからない」

ウエンもここがどこかわからなかった。それに、どうしてこんな所に居るのか？それに、父さんはどうして・・・ウエンの心の中には不安や恐怖が黒くつのつていくような感覚を覚えた。イリアもまた、同じ思いで今にも泣きそうな顔を必死に隠そうとした。

光の雪のような物が降ってきた。

「何、この光？」

2人は光の雪を手の平に乗せようとした。しかし、光の雪は2人の手を通り、光の雪はやがて、机の形になりそしてシルバーのチェー

ンネックレスとシルバーのリングが机の上に現れた。

「ウエン」

イリアとウエンはうなずき、ウエンはネックレスをイリアはリングをそれぞれ手に取った。

するとウエンが手に取ったネックレスから一匹の白猫が、イリアのリングから黒猫が現れた。

「うーん、よく寝たな。ありがとう、坊や。」

白猫が言葉を発したので、ウエンは驚き、体が跳ねた。

「うわ、猫がしゃべった。」

「そんなに驚かなくても、それに猫がしゃべっちゃいけないのかな？」

白猫はそう言いながら、ウエンの肩に乗った。

「まあ、いいじゃねえか。嬢ちゃん。俺はネス。彼女はルナだ。よろしくな。」

黒猫も<sup>ネス</sup>肩に乗った。

「よろしく。俺はウエン。ウエンディア・ルーズベルト。よろしくルナ」

ウエンはニツコリと笑った。ルナもあいさつ代わりに頼ずりをした。

「よろしく。私はイリア・ガイナックス。よろしく、ネスさん。」

ねすもまたにっこりと笑った。

「ネスさん、ここはどこ？」

イリアは白い地面に正座の状態で座り、ネスを膝の上に乗せて頭をなでた。ウエンもイリアの隣にあぐらの状態で座り、ルナはウエンの足の上に座った。

「ここは、時空のはざま。過去も未来もない時間の止まった世界。」  
ネスは淡々と語り、ルナの方を見た。

「ウエン、イリア、あなた達は神に選ばれたのよ。」

「「え!?!」」

ウエンとイリアは驚き、一瞬何を言っているのかわからなかった。

「そう君たちは、神王様<sup>シンオウ</sup>に選ばれたんだ。」

ネスは白い地面に降り、伸びをした。

「それじゃ、ルナやネスは神王様の使いなのか？」

ウエンは神王様を予想した。きつと、頑固な老人で、ローブを着こんで人間たちを見て楽しんでいるのだろう思った。

「そうよ、私たちは神王様の使い見たいのものね。」

ネスは軽々と自身の身体の何倍もある高さの机を軽々と飛び乗った。「そろそろ、私たちの話をしたいかしら？」

ルナも机に飛び乗り、ネスの隣に飛び乗った。2人はうなずいた。それを見たルナは話し始めた。

「私たちがこの時空のはざまに連れて来たの。それは、魔の地つまり、地下の世界から悪魔、あなた達と言うカオスが地上を荒らし始めたの。もともと悪魔は時々、偶然にも出てくることがあったらしいけど、ここ数年、悪魔の出現が多くなって来たの。それで、神王様はおかしいと思って、適正者を探し始めたの。それ・・・」

「ちょよ、ちょっと待って、いくつかわからないことがあるんだけど。」

ウエンは耐え切れなく言葉を遮ってしまった。

「何？」

ルナは怒ることなくウエンの疑問に答えようとした。

「俺たちの住んでる世界とほかに悪魔の世界、ルナやネスがいる世界はどういう風になりつつあるのさ？ それに、てきせいしゃってなんのこと？」

とウエンの疑問にネスが答えた。

「それは俺から説明しよう。まず世界はイリアとウエンの住んでいる世界の上に俺たちが住んでいる天上界。天上界は浮き島と呼ばれる人が乗ることができる雲に人たちが住んでいんだ。逆に下の世界は実はどんな所かわからないのだけど、文献ではマグマに<sup>フンケン</sup>囲まれた世界で悪魔が住んでいるけど、詳しいことはわからないんだ。

適正者は私たち天界の人間に近い血筋の人間のことだ。」

ネスはできる限りの説明を言い終えて、2人を見た。

「大体わかった。けど、悪魔が出てくる理由は？」

イリアも疑問をネスに投げた。

「それは悪魔以外にはわからないの？」

ルナは少し言い辛そうに答えた。

「わかったわ。話を続けて、ルナ。」

イリアはルナの気持ちを察知して話をつづけさせた。

「ありがとう。適正者を探して、君たちのを見つけたわ。しばらくあなた達を見てすぐに神王様に2人を見せたらすぐに行って来いって言われたわ。そして、村に着いたら力オスがいて、何とかここまで連れてこられたってわけなの。」

取り合えずルナは言い終えた。それを確認してから今度はネスが話し始めた。

「それじゃ契約とそのアクセサリーについて話そう。」

ネスは2人を見て、話を続けた。

「契約はそのアクセサリーをつけて魔法陣により契約の印という呪文を唱えて終わり。契約後はアクセサリーは契約解除しない限り外せない。アクセサリーは契約により力が発揮され、身体能力などが上がる。最大の特徴は武器の生成だ。武器はその人により武器は変わり、その人の成長により武器も変わるんだ。終わり！！」

ネスはそう言つて2人を見てから、2匹で呪文を唱えた。

Appear in the name of the contract (汝、  
ss. The seal of the contract (汝、  
ネスの名のもとに現れよ 契約の印を)

マナはそういうと、魔法陣が白い地面から青く浮き上がった。

「それじゃ、説明も済んだし契約の印をしましうか。」

ネスは魔法陣の中に入った。

2人は、顔を見合せうなずいた。2人の思いは一緒。村の人たちや力オスに怯える人たちに勇気を与え力オスを・・・悪魔を倒し原因を突き止めようと決めた。

「わかったわ。契約しましょう。」

イリアとウエンは魔法陣の中に入った。

「2人とも目を閉じて。」

ルナはそう言って、呪文のようなものを唱え始めた。

I'm the person who watches  
a contracting party. Based on  
making a contract I give the p  
ower to contracting parties. (我、  
契約者を見守る者。我、契約に基づきこの者らに力を授けん)

ルナが唱え始めると魔法陣から金色の粒子が、2人と2匹の周りに集まり、粒子はやがてウエンのネックレスとイリアのリングに粒子が集まり、やがて、その二つと2匹は粒子となり、それぞれの前で1つの形を形成した。そして、まばゆい光りに2人につつまれた。



## 二羽目 襲撃そして力（後書き）

登場人物 2

イリア・ガイナックス

AGE：15

MAIN weapon：小銃

SUB weapon：ナイフ

ガーナ霊山の村に住む少女。赤茶色な瞳に金色の髪をポニーテールにしている。最近、ウェンいじりを楽しんでいる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0516e/>

---

白き翼

2010年10月30日21時08分発行